

沿岸イワシ類資源有効利用調査

(第2県土水産資源調査)

佐々木 正・村山達朗

1. 研究目的

平成14～16年にかけて行った沿岸漁業実態調査の結果、本県沿岸漁業の複合経営を進めるためには、冬から春に操業可能な漁法の導入とイワシ類の資源動向の把握にあることが示唆された。そこで、イワシ類幼魚（以下「シラス」と称す）を対象とした知事許可漁業（すくい網漁業や船びき網漁業）がありながら、近年ほとんど操業実績のない石見東部海域において、シラスを対象とした漁業の再構築の可能性を検討するため、シラスの分布実態調査と既存の漁船でも操業可能な船びき網漁法の開発を行う。

2. 研究方法

(1) シラス分布調査

平成18年6月～10月に江川、三隅川および周布川の河口沖合周辺において、試験船「明風」により魚群探知機を用いてシラス魚群の分布調査を実施した。シラスと思われる魚群を確認した場所では、アイザックス・キッド中層トロールネットなどを用いてシラスの採集を試みた。

(2) 試験操業調査

分布調査でシラスの魚群が確認された江川河口沖合周辺において、前年度作製した試験漁具を用いてシラスの試験操業を実施した。操業は同地区の定置網漁船2隻（19t、9t）を借り上げ、2艘びきにより実施した。操業回数は平成18年11月21日～平成19年1月15日に計10回、1回当たりの曳網時間は15分～30分、1日当たりの操業回数は2～6回であった。

(3) 試験漁具の作製

現在操業が行われている県西部の2艘曳きの漁具に小型水深計（STAR-ODDI社製）を取り付けて操業時の漁具の運用についての詳細な調査を実施した。得られた調査結果を基に試験操業用の漁具を作製した。

3. 研究結果

(1) シラス分布調査

6月に三隅川および周布川の河口沖合周辺において実施した調査では、魚群探知機にカエリ（シラスより大型のもの）と思われる濃密な魚群が観察された。10月に江川河口沖合周辺において実施した調査では、魚群探知機にシラスと思われるまとまった魚群が観察されたが、いずれも中層トロールネットによる魚種の確認はできなかった。

(2) 試験操業調査

試験操業により計1,307kgのシラス（平均体長31～38mm）が採集された。操業1回当たりの採集数量は最大で100kg、平均で44kgであった。試験操業における採集数量は、実際に同漁法が行われている地区のものと比較すると少ない結果となった。この原因としては、試験に用いた漁船に魚群探知機やVローラーなどの漁労機器の装備が無かったことや1艘びき漁具を2艘びきで用いたことなどにより操業効率が低くなったと考えられた。

(3) 試験漁具の作製

作製した試験漁具の有効性については次年度に試験操業を実施することとした。